

近世哲学研究

第 12 号

-
- 形而上学的認識と超越論的認識 —— 大橋容一郎 1
—— カントと認識の形而上学・序論 ——
- 「この私」はなぜ謎を呼び起こすのか —— 冲永 荘八 34
—— 私に付属する性質が消去された視点からの考察 ——
- 反現象学の道 —— 次田 憲和 57
—— フランツ・布伦ターノにおける非超越論的現象学と
個体主義的存在論に基づく直接实在論的認識論について ——
- 超越論的反省とはなにか —— 佐藤 慶太 75
—— 「反省概念の二義性」章の三段構造とその意味 ——
-

2005

京大・西洋近世哲学史懇話会

編集後記

本年も『近世哲学研究』をお届けする時期を迎えた。まずは編集実務に携わってくださった方々の労をねぎらいたい。

改めて言う必要はないかもしれないが、わが国においては、近年、文学部や理学部の基礎学問をとりまく状況はますます厳しくなってきた。大学が独立行政法人化し（そのこと自体について批判するのではないが）、産学協同が大手を振って機能し始め、その結果、社会に直接関わる学問や研究がますます奨励されることになった。そのようななかで、今、現在、日本の大学で進行しているいろいろな企画や改革は、そのほとんどが、理工系（とりわけ産学協同の母胎となりうる分野）の発想に主導されていると言つてよい。この国では、明治以来、今に至るまで、文化というとすぐに科学技術に結び付けられてしまつたのである。このような状況で、文学部、とりわけそのなかでも「哲学」のような、文字どおり実益に関わらない学問は、その存在理由が危うくされている。それも、「現代思想」というレッテルが貼られるものもてはやされるものの、「哲学史」という分野はさらに厳しい。そのような状況で、近世哲学史の研究を続けるには大きな勇気があるかもしれない。とくに、英語以外の語学をも修得しながら研究するというのは大変な労苦であると言つてよい。

しかし、西洋では、哲学が文化の基盤でありつづけて、そのことに国民的コンセンサスが確保されている。そし

て、その哲学の教育と研究とは、なによりもまず哲学史上の大思想家についての教育と研究なのである。そのような体制のもとで、彼らの国の文化が生育しているのである。それでヨーロッパにおいては哲学史の研究を推進している人々は大きな自信と誇りを持っている。このような状況がわが国においては定着しておらず、そのことはわが国の文化的未熟を示すことなのである。その意味で、わが国において「近世哲学史」に携わる人たちは、おおげさに言えば、誇りと使命感を持つていただきたい。われわれの行っていることは文化の基盤の形成につながるようなことなのである。ただし、その場合、私がいくつかの機会で言ったことであるが、哲学史研究によつて、思想の発現のための「体力」を養い、いろいろな領域や問題に対して発言しうる「知的迫力」を身につける必要がある。それは、哲学史上の思想の巨人の体系と格闘することによつて可能となるのである。そうして、このいまだに文化的に成熟していないわが国の状況のなかで哲学史研究の存在価値を、いろいろな機会にいろいろなスタイルで訴える必要がある。本誌はその一翼を担うものなのである。

今回は大橋容一郎先生に寄稿していただいた論文と三つの労作を掲載することができた。大橋先生には厚くお礼を申し述べたい。今、われわれの教室は新たな進展を見つつある。本誌のさらなる発展を心掛けたい。

(K)

『近世哲学研究』（既刊目次）

第一号（一九九四）

祝辞 酒井 修
ハイデッガーにおいて哲学を 田中 敦
—— 現存在の現象学的存在論考究 ——
カントと初期フイヒテとの接点 北岡 武司

義務論としてのカント倫理学 蔵田 伸雄
—— 功利主義との対比 ——
対象と反省 山脇 雅夫
—— ヘーゲルの矛盾概念の理解のために ——

第二号（一九九五）
カント哲学における「経験」概念について 福谷 茂
—— 「世界」概念導入のための
端緒として ——

ヘーゲルのコルポラツイオン論 早瀬 明

—— 市民社会の団体主義的変革に向けた
ヘーゲルの試み ——

工学はどういうタイプの学問か

信仰の情熱とその逆説 田中 一馬
—— キェルケゴール『おそれとおののき』
におけるアブラハム解釈をめぐって ——

ハイデッガーのヘーゲル解釈 橋本 武志
—— 意識の二義性と意識の転換 ——

第三号（一九九六）

『全知識学の基礎』の到達点 子野日俊夫
読書人世界から学者共和国制度へ 福田喜一郎

—— 理性を制度化しようとした
カントの試み ——

デカルトにおける愛の区別について

未済の人倫 石田あゆみ
—— 『精神の現象学』主一奴論の一解釈 ——

ガダマーのデイルタイ批判 折橋 康雄

—— 『真理と方法』を中心に ——

第四号（一九九七）

一本の綱 (Sei) としての人間 吉川 康夫
—— ニヒリズム状況下に於ける
人間と社会の問題 ——

デカルトの懐疑について 安藤 正人
—— 『省察』の「反論と答弁」を
資料として ——

市民と国家の媒介 小川 清次

—— 「国民」形成の二側面 ——
『存在と時間』に於ける可能性概念の
多義性について 橋本 武志
自然主義的存在論の隘路 次田 憲和

—— フッサールの「領域的存在論」における
超越論的構成の「自己関係的構造」 ——

第五号（一九九八）

「常に誤る」と「時々誤る」 武藤 整司
—— デカルト的行論の一考察 ——

デイルタイに於ける客観的精神の概念
について
折橋 康雄

ハイデガーの他者論
安部 浩

第六号（一九九九）

デカルトにおける《真理》と《存在》
倉田 隆

——明晰かつ判明に知得されるもの——
ヘーゲルの根拠論
山脇 雅夫

——知と存在との相即——
「第五省察」の隠された論理
次田 憲和

——「他者構成論」理解のための一視座——
シエリング哲学の出発点
浅沼 光樹

——人間の理性の起源と歴史の構成——

第七号（二〇〇〇）

—— 菌田坦教授 退官記念号 ——
菌田坦教授 略歴・業績一覽

《講演》

近世哲学における神の問題
菌田 坦

近世哲学とはなににか
福谷 茂

——新しい哲学史像のために——
人間の輪郭
武藤 整司

——その曖昧さを擁護するために——
知の自己吟味
山脇 雅夫

——『精神の現象学』緒論における
知と即自の区別について——
ハイデッガーの良心論再考
橋本 武志

——可能性概念を手がかりに——
生と音楽
折橋 康雄

——デイルタイに於ける
生と音楽の時間性の問題をめぐって——

自由の軌跡
北岡 武司

——批判哲学における
自由の可能性の意味——
認識か解釈か
福谷 茂

——新しい哲学史像のために（二）——
G・ハーマン相対主義説の論理

歴史的理性の生成
田中 一馬
浅沼 光樹

——シエリング『悪の起源』における
神話解釈の意義——

《書評》
北岡武司著『カントと形而上学―物自体と
自由をめぐって』
橋本 武志

N・ケンプ・スミス著（山本冬樹訳）『カン
ト』純粋理性批判』註解』
長田 藏人

第九号（二〇〇二）

『存在と時間』と哲学の方法（形式的挙示
再考）
田中 敦

フッサールにおける他者経験の構造と発生
榎原 哲也

ワイトゲンシュタインの「規則に従う」論
の若干の考察
子野日俊夫

復古のもとでの立憲主義
竹島あゆみ

——ヘーゲル法哲学講義（ベルリン
一八一九／二〇年）の二つの講義録——

《書評》
ヤーコプ・ペーメ著（菌田坦訳）『アウロー
ラー明け初める東天の紅』
福谷 茂

第一〇号 (二〇〇三)

十年の歩みを顧みて

菌田 坦

デカルトと自覚の問題

実川 敏夫

——コギトの弁証法性——

アレゴリーの復権をめぐる

高田 珠樹

——ガダマーとポール・ド・マン——

行為の規範としての礼節 (decorum) の意義

福田喜一郎

——クリスチャン・トマージウスにおける

法・道徳・礼節の区別——

格率とその「枠組み」

西川小百合

——カントの道徳判断論の

新しい理解を目指して——

《書評》

福居 純著『デカルト研究』

浅沼 光樹

第一一号 (二〇〇四)

カントにおける崇高の経験

牧野 英二

イデオロギー批判の技術哲学 橋本 武志

——マルクーゼ・ハーバーマス論争を

手掛かりに——

『感性の弁護』(Apologie für die Sinnlichkeit)

とは何か

長田 蔵人

——カントの「直観」概念の

見過ごされたアスペクト——

『純粹理性批判』の反実在論的解釈

千葉 清史

——その内実と意義——

《書評》

武藤整司著『人間の輪郭—共生への理念』

吉川 康夫

編集委員会

委員

小林 道夫

福谷 茂

福田喜一郎

山脇 雅夫

長田 蔵人

佐藤 慶太

執筆者紹介

大橋容一郎 上智大学教授
沖永 莊八 帝京大学教授
次田 憲和 大阪体育大学非常勤講師
佐藤 慶太 京都大学大学院文学研究科博士後期課程

(執筆順)

近世哲学研究 第12号

2006年3月31日 発行

編集・発行 京大・西洋近世哲学史懇話会
編集代表 小林 道夫
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
京都大学文学部
西洋近世哲学史研究室内
<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/modophil/>
TEL (075) 753-2444
振替 01080-3-31430

印刷所 協和印刷株式会社
〒615-0052 京都市右京区西院清水町13
TEL (075) 312-4010(代)

定価 1200円(本体 1143円)

STUDIES
in
MODERN PHILOSOPHY

No. 12

《Articles》

- Yoichiro OHASHI : „transzendental“ und „metaphysisch“ 1
—— Vorrede zu „Kant und Metaphysik der Erkenntnis“ ——
- Shohachi OKINAGA : Why does a Mystery emerge from “This Me”? 34
—— A consideration from the viewpoint where
all characters belonging to me are abolished ——
- Norikazu TSUGITA : Der Weg der Antiphänomenologie 57
—— Über die nichttranszendente Phänomenologie und
die auf die individualistische Ontologie gegründete
direkt-realistische Erkenntnistheorie bei Franz Brentano ——
- Keita SATO : Was ist die transzendente Reflexion? 75
—— Die dreistufige Struktur des Amphiboliekapitels und
ihre Bedeutung für das Verständnis der Kritik der
reinen Vernunft ——
-

2005

Published by
The Society for The History of
Modern Philosophy
at Kyoto University